

直言

私自身が世話人の一人をつとめる「アジア・オープン・フォーラム」第二回東京会議が去る七月十一日から十三日まで、東京と大磯で学界・財界・言論界などからの多数の参加を得て開催され、数多くの成果を得て閉幕した。このフォーラムは、国交がないがゆえに、経済的・人的な深いつながりにもかかわらず、従来、十分に広いチャネルが存在しなかった日本と台湾とのあいだに、高いレベルの知的交流の場を設けようとして発足したものである。

昨年六月末の第一回会議は、李登輝総統を迎えて台北で幕を開け、閉会後は日本側代表団とともに日本のマスコミ各社の特派員全員が李総統と親しく会談する機会があつて、好評だった。北京の天安門事件直後だっただけに、台北の対中国大陸政策が大いに注目されたのである。

今年の第二回会議には、台湾から現職閣僚

台湾と国交なくとも交流を



東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

の郭婉容・経済建設委员会主任委員(前財政部長(大蔵大臣))が貴賓として出席し、「世界経済の中の『台湾経緯』」と題する特別講演を行った。郭女史は、昨年五月のアジア開発銀行年次総会に初めて台湾代表を率いて北京を訪れ、人気を博した才媛である。十一日夜の開会式に臨んでは高原須美子さんと隣を接し、日台双方の前・現職の経済企画庁長官が談笑している姿は大変好ましいものであり、また、レセプションの席上で竹下元首相ら日本の各界人士と交流していたことも印象的であった。

だが、このような光景は、台湾が日本の貿易相手国(地域)として第四位、台湾側からすればアメリカに次いで日本が重要な相手だ

というのに、これまで日台間になかったことなのである。そのこと自体が異常であり、日台関係は、今回、その正常化に向かって一歩前進できたと言える。

今回は、日本政府・外務省も主体的な立場から大局的な判断をし、現職閣僚の入国も可能であった。いまや国際経済の相互依存関係がますます進み、政治やイデオロギーの壁を越えて人の交流を拡げていかなければならない時代なのだから、国交がなくても、交流はできるようにならなければならない。そうであるならば、世界に開かれた日本だとは言えないであろう。わが国は、NIEES諸国(地域)との関係の強化をしばしば唱えている。そのNIEESの中でもっとも安定し、もっとも成績のよい台湾をぬきにして、アジア・太平洋地域の将来を語るわけにはいかないことを、今回のフォーラムで私は再確認せざるを得なかった。